
【特集】公害資料館を考える

特集にあたって

清水 善仁

澤井余志郎（1928-2015）は四日市公害を伝え続けた「記録の人」⁽¹⁾である。澤井は自身がかつて培ってきた生活記録運動の経験を公害反対運動に活かそうと考え、多くの被害者を訪ね、話を聞き、写真を撮ることで、公害を記録した。公害を記録する会発行の『記録「公害」』には、被害者や漁師たちの聞き書き等、澤井がまとめたさまざまな記録が掲載されている。掲載にあたって澤井は「漁師たちやぜんそく患者さんから聞いた話は、磯津ことばのまま、文集に載せた」⁽²⁾という。「公害の実態は、何 ppm といった数字からではなく、苦しんでいる被害者である患者、住民の想い、実際を知ることからはじめるものでなければならない」⁽³⁾という考えのもと、聞いたままの言葉で記録に残すことに、その意義を認めていたのではないだろうか。

1984（昭和59）年に刊行された『くさい魚とぜんそくの証文——公害四日市の記録文集』に、「公害を記録するという事について」と題された澤井の文章がある。このなかで澤井は「あやまちを再び繰り返ささないために、事実を確認し、記録していくことは、いまもなされなければならない」⁽⁴⁾と記している。澤井にとって記録を残すことは「あやまちを再び繰り返ささないため」の取り組みであった。この言葉から30年余が経過した今日、澤井の残した膨大な記録は、同時代の人々はもとより、公害を直接経験していない若い世代の人々にとっても、四日市公害の実態を知ることができる貴重なアーカイブズとなっている。記録は、残そうという意志がなければ残りにくいものである。残された記録から何を学び、何を伝えるか。これはいまを生きるわれわれに課せられた使命である。

ところで、このような公害の実態を伝える記録を、いかにして保存し将来に継承していくかは大きな課題である。近年、被害者団体の解散や高齢化等にともない、管理していた記録が廃棄され、あるいは散逸してしまったという話を聞くことがある。公害の歴史を伝える記録がなければ、当時の実態を知る手がかりは失われ、われわれは二度と公害にかかわる過去の事象を正確に復元することができなくなってしまう。公害にかかわる記録の保存と継承は、実に今日的な課題なのである。

そうした課題に対して、重要な役割を果たす存在の一つに公害資料館がある。公害資料館は、公

(1) 「記録の人」という言葉は、四日市再生「公害市民塾」のWebサイトより引用した（<http://yokkaichi-kougai-www2.jp/index.php/kochira-shiminjuku.html> [2017-08-24 参照]）。

(2) 澤井余志郎『ガリ切りの記——生活記録運動と四日市公害』影書房、2012年、76頁。

(3) 同上。

(4) 澤井余志郎編『くさい魚とぜんそくの証文——公害四日市の記録文集』はる書房、1984年、23頁。

害にかかわる記録を収集・整理し、展示や語り部による講話をおこなうことで、公害の歴史をいまに伝えている。ちなみに、先に紹介した澤井の記録も、四日市の公害資料館である四日市公害と環境未来館に収蔵されている。

しかし、公害資料館の存在を知る人は必ずしも多くない。たとえば四大公害病といわれた公害の発生地域すべてに、公立の公害資料館が設置されていることをどれだけの人が知っているであろうか⁽⁵⁾。知られていなければ、公害資料館に収蔵されるさまざまな記録が閲覧されることはないし、その地域の公害の歴史を追った展示を見学することもない。多くの人に活用されてこそその公害資料館でなければならないはずである。

このことは、公害資料館のみならず、公害そのものに対する認識とも深くかかわるものかもしれない。公害が過去のものとなりつつあるいま、現代の人々が公害の歴史を正しく知り、またその記憶を将来に伝えるためにはどうしたらよいか。展示や語り部等による公害経験の〈伝え方〉や〈学び〉のストーリーを考えること、あるいは公害にかかわる記録の整理や公開を進めること等、公害資料館がいま取り組まなければならないことは少なくないのである。

その意味で、2013（平成25）年に全国に存在する公害資料館の連合体として結成された「公害資料館ネットワーク」（以下、ネットワーク）は注目すべき存在であり、また果たすべき役割も大きい。その詳細は本特集掲載の林論文にゆずるが、毎年12月に開催される「公害資料館連携フォーラム」（以下、フォーラム）には全国の公害資料館関係者等が顔をそろえ、各地の取り組みの共有化や情報交換がおこなわれている。参加者はここで得た知見をみずからの館にフィードバックすることで、新たな取り組みや方法への示唆を得ることができる。そしてこれは、公害資料館が設立されていない地域で、記録の整理・保存や記憶の継承の取り組みをおこなっている人々・団体にも有益なことであると思う。現に、2016年度のフォーラムのアンケートに「これから資料館づくりをやるにあたって、多くの課題を学んだ。難しさを知った。」という回答があった。公害は全国さまざまな地域で規模の大小を問わず発生した。そのすべての地域にいま公害資料館があるわけではない。したがって、公害の記憶を伝えるための努力とその取り組みは、公害資料館の活動のみで語ることはできないのであり、幅広い視野からこの問題を捉え、かつ検討することが求められるのである。

その場合、ネットワークやフォーラムの場でおこなわれている、公害資料館における記録の整理・活用の在り方や公害教育の実践例の紹介等といった実務的な議論はもちろん重要だが、それとは別に、学術的な立場や視角から公害資料館の存在や役割、あるいは公害の記憶継承の方法等を理論的に考察することも必要なことではないだろうか。こうした理論と実務の往復が、先記の諸課題に対する認識や理解を深める可能性をなしとしない。公害資料館をめぐる学術研究は、理論と実務の両面において少なからぬ意義があるものと考えられる。

以上のような問題意識から、特集「公害資料館を考える」を企画した。以下、所収の各論文の概要を紹介する。

(5) [熊本水俣病] 水俣市立水俣病資料館（1993年設立）、[新潟水俣病] 新潟県立環境と人間のふれあい館（2001年設立）、[イタイイタイ病] 富山県立イタイイタイ病資料館（2012年設立）、[四日市ぜんそく] 四日市公害と環境未来館（2015年設立）。

林美帆「公害資料館ネットワークの意義と未来」

2013年のネットワーク結成の意義とその未来について、ネットワークが結成される前史としての公害資料館の位置づけの実態を、公害教育や公害経験の伝承、被害者・企業・行政との関係等から考察し、結成後の変化をネットワークの取り組みを通して明らかにする。ネットワークは資料館相互を知る「[鏡]のような役割」(11頁)を果たし、協働ビジョンの策定等を通じて、ネットワークの基礎が築かれつつあると評価する。そのうえで林氏は、ネットワークの未来を資料収集やSDGs（持続可能な開発目標）の視点から検討するが、意義と未来のいずれの指摘においても、〈対話の場〉としてのネットワークの存在を重視する。

小田康徳「歴史学の立場から見る公害資料館の意義と課題」

小田氏は、公害資料館の将来を展望するなかで、館自身による資料に基づいた公害問題の歴史的な意義解明への努力の必要性を指摘する。ただ、そのことを進めていくためにはどうしたらよいか。小田氏はまず、公害問題と歴史認識との関係から、公害問題史研究によって得られた歴史認識の基本的な視点を検討することで、公害資料館の活動に歴史的な文脈を取り入れるための前提の議論を示す。ついで、歴史的な解明に必要な資料の現状について、ネットワーク等によるアンケート調査結果を紹介し、あわせて課題を析出する。そのうえで公害資料館が収集・保存すべき資料を「理想を追いつつ」(28頁)提起するとともに、現時点ですべきこと／できることの具体的な方策や意義を論じる。

清水万由子「公害経験の継承における課題と可能性」

公害が次第に過去の出来事となっていくなか、公害を二度と繰り返さないための公害経験の継承について、その課題と可能性を論じる。まず、公害を〈伝える〉という観点から、公害資料館の設立主体によるスタンスの違い、公害被害者の捉え方、そして加害経験の継承の問題を指摘する。ついで、時代の変化にともなって生じる公害を〈学ぶ〉ことの難しさを、清水氏自身の教育の経験や戦争被害をめぐる事例を紹介しつつ、「なぜ今、公害を学ぶのか」(39頁)という問いに対する個人／社会レベル双方での問題点を提起する。そのうえで〈生活実践のなかの公害経験〉という視点から、公害を伝えることと学ぶことへの可能性を見出す。

いずれの論文も、これまでの状況や実態をふまえた分析がなされるとともに、執筆者それぞれの専門分野の視点から個々の問題についての追究がなされている。公害資料館をとりまく現状や課題、あるいは公害の記憶継承をめぐる今日的な状況等について、理解が深まることは疑いないであろう。本特集を通して、多くの読者が公害資料館を知り、そして考えるきっかけとなれば幸いである。

なお、公害資料館をめぐることは、本特集で取り扱う内容以外にもさまざまな課題が指摘されている。それらについては、別の機会にあらためて取り上げ、論じることとしたい。

（しみず・よしひと 法政大学大原社会問題研究所准教授）